

(3)MSMを対象とした健康のためのコミュニケーション支援ツールの開発と評価

- 研究分担者：野坂 祐子(大阪大学大学院人間科学研究科)
- 研究協力者：生島 嗣(特定非営利活動法人ぶれいす東京)
山口 正純(博慈会長寿リハビリセンター病院)
三輪 岳史(特定非営利活動法人ぶれいす東京)
吉田 博美(駒澤大学)

研究要旨

MSMのHIV感染と薬物使用を予防するうえで、リスク行動を避け健康に生活するためのコミュニケーションスキルの向上が求められる。とくにトラウマや逆境体験の影響により感情の表出や調整、安定した対人関係構築が困難な若年MSMに考慮した支援が必要と考えられ、文献調査をふまえ、セルフスタディ用の支援ツールを作成した。MSMのコミュニケーション支援として、昨年度に作成した2本の動画(「コミュニケーションのタイプ」「感情の理解」)に加え、「境界線(バウンダリー)」と「I(アイ)メッセージ」の動画を作成し、公開した。これらの動画教材を用いた4回のオンライン講座を実施し、のべHIV陽性者25名が参加した。また、HIV支援に関わるコミュニティのスタッフ計12名へのフォーカスグループインタビューを実施し、当事者および現場のニーズと課題を把握した。

A 研究目的

MSMのHIV感染と薬物使用を予防する上で、リスク行動を避け健康に生活するためのコミュニケーションスキルの向上が求められるが、とくにトラウマや逆境体験の影響により、感情の表出や調整、安定した対人関係構築が困難な若年MSMに考慮した支援を行う必要がある。そこで、安全で健康的な関係性に必要な内容を含むセルフスタディ用の支援ツールを開発し、評価を行う。

これにより、若年のMSM、とくにコミュニケーションスキルの課題によってHIV感染や薬物使用の予防行動がとりづらい集団に、スキル向上のセルフスタディの機会を提供することで、健康な生活を支援することが期待できる。

B 研究方法

文献調査によって把握されたMSMのHIV感染と薬物使用の関連性や行動傾向をふまえて、コミュニケーションスキルをテーマとしたセルフスタディツールの構成要素を検討する。自分自身のコミュニケーションタイプの自覚(self-awareness)を高めるための自己学習ツールを開発するために、1年目に実施したMSMを対象とした「アサーション・トレーニング」「ストレス・マネジメント講座」から抽出されたコミュニケーション上の課題に基づき、自己学習ツールをさらに2本作成し、【1】コミュニケーションのタイプ、【2】感情の理解、【3】境界線、【4】アサーションをテーマとする全4本のシリーズとした。

さらに、動画への反応や課題を明らかにするために、MSMを対象に本動画を教材としたオンライン講座を実施し、参加者(のべ25名)の反応を分析した。また、コミュニティ支援者(計12名)を対象としたフォーカスグループインタビューを実施し、現場のニーズと課

題を把握した。

(倫理面への配慮)

本研究は、大阪大学大学院人間科学研究科教育学系の倫理審査を受けて行われた。方法および結果において、調査対象者の個人情報に触れることはない。

C 研究結果

1. コミュニケーション支援ツールの開発

昨年度に作成した『ひげおとひげじのおしゃべりま SHOW』と題する各 15 分程度の動画の【1】よりよいコミュニケーションってなに？ ～爽やか・アサーション～、【2】気持ちに気づこう！ 怒りの冰山ってなに？ に続き、下記 2 本を追加し、Web 上で視聴できるようにした(Stay Healthy のサイトにて公開 <https://stayhealthy.tokyo/> : 図 1)。いずれも動画の内容の解説や自己学習用のワークが掲載されている冊子がダウンロードでき、視聴者向けの web アンケートも設定した。

【3】適切な境界線とは？ (バウンダリー)

昨年度調査より、コミュニケーションやストレス・マネジメントに関するプログラムに参加した MSM のなかでは、「他者からの依頼を断れない」「自分の意見をうまく伝えられずに相手に押し付けてしまう」といった自他の境界線にまつわる課題が多く挙げられた。トラウマや逆境も、安全や尊重といった「自分の大切な領域」を揺るがすものであり、境界線を破られ

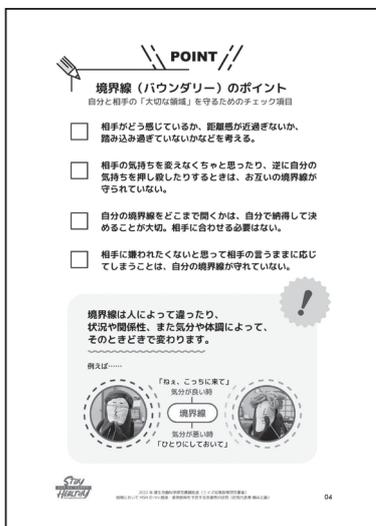


図 3.1 自己学習用ワーク：境界線(バウンダリー)

たことで境界線が脆弱になりやすい。よって、動画では心理的境界線、物理的境界線、社会的境界線の具体例を挙げながら、シリーズ【1】で取り上げたコミュニケーションのタイプとの関連性を示した。

【4】アイメッセージ(アサーション)

動画のまとめとして、コミュニケーションのスキルの一つである「アイメッセージ」を紹介した。これは他者を非難する言いかた(You メッセージ)ではなく、自分の考えや気持ちを相手を慮りつつ率直に伝えるものであり、【2】感情の理解とつながる課題である。また、自分の境界線(意思や権利)が侵害されたときに、自己主張するスキルであり【3】の境界線とも関連している。

シナリオでは、日常的なコミュニケーション場面を中心にしながら、「コンドームを使用しないセックスを求められたとき」の言い方も例示し、性の安全や健康を守るためのコミュニケーションスキルの学習効果をめざすものとした。

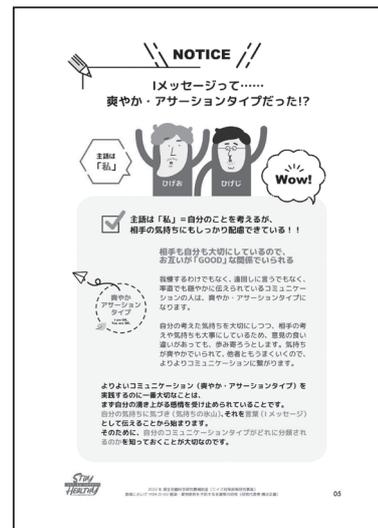


図 3.2 アイメッセージ(アサーション)

2. HIV 陽性者を対象としたオンライン講座

調査協力団体である NPO において「ストレス・マネジメント講座」と題するオンライン講座を開催し、上記 1. で作成した動画 4 本を教材にした。

講座は計 4 回、各回 90 分(19:30 ~ 21:00)で講師は教材の開発者(臨床心理士)、運営は NPO 団体職員 2 名だった。日程と参加者は、① 9 月 20 日(7 名)、② 10 月 25 日(8 名)、③ 11 月 22 日(5 名)、④ 12

月 20 日(5 名)、のべ 25 名だった。

動画の視聴後、参加者同士が小グループでワークを行い、意見や感想の共有を行なった。教材はセルフワークとして使用できるが、「ピアの立場から体験談や違う意見が聞けてよかった」等、対話による学びへの評価が高かった。

3. 支援者を対象としたグループインタビュー

都市部で HIV や薬物使用に関わる支援を行なっている 2 カ所の民間団体にて、支援者 12 名を対象に計 2 回、のべ 5 時間のフォーカスグループインタビューを実施した。

対象者の所感として、コミュニケーションが苦手な「言いなり (non-assertive)」のタイプが多い MSM には、動画の内容が適しているという意見が多かった。MSM の課題や性的場面に特化していない点は、汎用性があるというメリットとともに焦点化されていないことでの限界が指摘された。

また、ゲイコミュニティならではのカルチャーを反映させたり、MSM に限らず若者の「直接的な対話を好まない」コミュニケーションスタイルの傾向を考慮したりすることの工夫が挙げられた。

個人での視聴よりもワークショップ等で話し合う資料としての活用可能性が示唆され、それに向けた支援者向けの解説も必要と考えられた。

D 考察

MSM を主な対象とした動画教材と冊子の作成とその評価を行い、ツールの活用法について検討した。ワークショップ等での活用が示唆された。

E 結論

HIV と薬物使用のある MSM への支援のために、MSM のコミュニケーションの特徴とニーズをトラウマインフォームドケアの観点から理解し、ニーズに即した教材や機会の提供を行う必要がある。次年度は、教材を使用した支援のありかたについて検討する予定である。

F 研究発表

なし

G 知的財産権の出願・登録状況 (予定を含む)

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし